

第25回縮小社会研究会(2014年11月14, 15日)

ガンディー思想と縮小社会論:コ
ンヴィヴィアリティを軸として

石井一也

(香川大学法学部)

はじめに

- 18世紀半ば以降の経済発展；資源の大量消費／環境破壊／生物種の絶滅（→21世紀のグローバル化時代に深刻化）
- 報告の概要：ガンディーの経済思想；ガンディー＝タゴール論争とA・K・センの評価；ガンディー思想と縮小社会論
- コンヴィヴィアリティを軸として

1 コンヴィヴィアリティとは

(1) イヴァン・イリイチの「コンヴィヴィアリティ」 (conviviality)

- 日本語で「自立共生」;「共愉」と訳される。
- 人間どうしの、あるいは人間と環境(他の生物と非生物)との諸関係のなかで、各人が自立的でありながら他者を尊重し、相互に助け合う倫理。
- 「よろこびにあふれた節制と人を解放する禁欲の価値」を含む。

(2) 田辺明生の「地球大のコンヴィヴィアリティ」

・大澤真幸の「人間の社会性」を受けて、「より深い喜びを生む関係性を構築するという二次的な(より高次の)欲望」を前提とする「地球大のコンヴィヴィアリティ」の可能性を追求。

* 大澤の「人間の社会性」: 人間は獲得した獲物をその場で食べてしまうのではなく、一定の場所に持ち帰り、複数の個体たちのあいだで共食する。対象＝食物とのあいだに「距離」を挿入すること〔対象との間接化〕は、他者との関係の直接化という快樂をともなうプロセスの前提となる。

(3) 将来世代との「コンヴィヴィアリティ」の可能性

- ・「コンヴィヴィアリティ」は、本来共時的的概念(”con”は「共に」、”viviere”は「生きる」を意味する)。
- ・「コンヴィヴィアリティ」を、現在地球に生きている他者との関係性だけではなく、将来そこに生まれてくる他者との関係性に敷衍する必要性。

(理由：人類の現代世代は、自分たちのあいだにおいてだけではなく、将来世代とも資源を分かち合って生きてゆくことが求められるから)。

2 インド独立運動

- (1) 非暴力不服従運動: イギリス人を友人として送り出す。
→ 対外的コンヴィヴィアリティ(インドーイギリス間)

- (2) 建設的プログラム: ヒन्दゥー=ムスリムの融和; 不可触民差別の廃止; 手紡ぎ・手織り。
→ 対内的コンヴィヴィアリティ(宗派間; 社会階層間;
経済的階級間)

3 ガンディーの経済思想

(1) 近代文明批判

- ・ガンディーの見ていた「近代」: イギリス工業のための世界経済の再編成(当時のグローバル化)
- ・「インドを踏みにじっているのは、イギリス人の踵ではなく、近代文明のそれである」。
- ・機械による経済発展→西洋諸国による帝国主義支配→世界戦争

「機械は近代文明の象徴、大きな罪」; 「インドを貧困にしたのは機械です。マンチェスターがわれわれに与えた損害ははかり知れないものです。インドの手工業がまったく姿を消してしまったのはマンチェスターのせいなのです」。

=>インドの工業化に反対。

- ・真の意味での文明: 必要物の拡大ではなく、その慎重な、そして自発的な削減によるもの。

(2) 経済学批判

- ・質問「人は、もっとも良い、もっとも安い市場で物を買うはずであるという経済の法則は悪いことですか？」

答え「それは、近代の経済学者によって示された格言のなかでもっとも非人間的なもののひとつです」。

・西欧の経済学

①A. スミス(利己心、資本蓄積、分業、国富の増大):「スミスにとっての純粋な動機である人間の利己主義は克服されるべき『錯乱要因』」;(予定調和説)「非道徳が道徳の名のもとに教えられる」。

②D. リカードウ(定常状態の回避策:機械の導入・海外からの農産物輸入)

③J. S. ミル、E. G. ウェークフィールド(帝国主義論:資本輸出・移民・開発)

=>「近代文明に酔っている人は、それにたいして反対するようなことは書かない」;「一国が他国を支配することを許す経済学は非道徳である」。

(3) マルクス主義批判

- ・ボルシェヴィズム・・・「私有財産の没収と、国家によるその集団的所有の維持のために自由に暴力を使用する」。
=>「私は、小銃を突きつけて人間の心から悪を除去できるということを信じない」。
- ・J. ネルー:「村落は、知的にも文化的にも後退、・・・なんの進歩も生まれない」→社会主義的大規模工業化を主張。
- ・K. マルクス:インド民族は「下劣で、不活動的」;「イギリスの干渉」による「半野蛮的、半開明的共同体[=インド村落]の解体」は、「アジア最大の、唯一の社会的革命」。
- ⇔ガンディー:「インドの事情は独特なもの」;「他国の歴史を参考にする必要はない」→手紡ぎ・手織りなど村落工業を主張。

チャルカー(手紡ぎ車)を廻すガンディー



(4) チャルカー運動:「脱近代」の経済建設

- ・カーディー(手織綿布)の工程をすべて手作業とし、労働の機会を広く分配して貧者救済を目指す(AISA)。
- ・外国製綿布を排除。しかし、インド民族資本による機械製綿布が市場を席卷(1920~40年代)。
- ・これまでの評価:
 - (a)インド経済史(T. ローイ; S. グハ; P. ハーネッティ; 柳澤悠; 篠田隆):「市場」に注目。カーディーの規模はきわめて小さかったと評価。
 - (b)文化人類学(B. コーン; S. ビーン; E. タルロ; L. トゥリヴェーディー):カーディーの文化的インパクトはきわめて大きかったと評価。
- ・経済的規模:
 - 篠田: 1929/30年の全インド綿布生産に占めるAISAカーディー(手紡ぎ・手織り)は、0.3%。

=>「市場」の外にあったカーディー*を含めると、全綿布生産の3~5%(1050~1750万人分)・・・独立運動を担うに十分。

*手紡ぎ系の統計は不在。マンモーハン・ガンディー:「工場製綿糸と輸入綿糸の10%相当が1896/97年から1929/30年までのすべての年にわたって、手織り機が利用できた手紡ぎ糸であったにちがいない」→推計可能。

・経済的妥当性

工場 v.s. 全インド紡ぎ工協会 (AISA) および関連機関

	工場(1930/31年)	AISAその他(1929/30年)
綿布生産 a	24.81億ヤード(100.00)	1167万6930ヤード(0.47)
雇用者数 b	39.5万人	11万7509人
1人当たり生産 a/b	6281.01ヤード(100.00)	99.37ヤード(1.58)
百万ヤード当たり雇用者数 b/a*1mil.	159(100.00)	1万63人(6300.00)

=>低生産性、低賃金、低品質(否定的評価)。しかし、高い労働集約度(機械の63倍)。

- ・ガンディーの考え：全綿布をチャルカーで賄えば、5000万人の貧者を養える。

⇔現実：綿布工場が、40万人弱の雇用で多額の富を独占。

- ・私有財産や工場の没収などマルクス主義の路線を拒否：「非暴力」の観点から。

- ・カーディーがたとえ高価でも、紡ぎ工や織工の生業を助けることを同胞に求めた。

＝「稼ぎのない親や子どもを養うことを恵みと考える」のと同様（コンヴィヴィアリティ）。

(5) 受託者制度理論

- ・富者は、みずからを神から財産の信託を受けた「受託者」(trustee)。その財産を貧者のために行使すべし。
 - ・「受託者」としてふるまう資本家や地主を擁護←マルクス主義者による批判
 - ・ガンディーの意図：本理論を通じて階級間の分裂を阻止。資本家には、チャルカー運動支援の負担。
- 富裕階級の擁護よりも貧者救済に力点(コンヴィヴィアリティ)
- =>インド社会の内在的矛盾を「非暴力」的に解決しようとした社会改革論。

(6) 理想の村落像

- ・究極的目標：70万の村落の自立
- ・理想の村落：「衛生の完備、十分な光と換気、自家消費用の野菜、家畜、共同利用の井戸、礼拝所、集会所、村落共有地、協同組合型の牧場、小中学校、村落それ自体の穀物、野菜、カーディー・・・」
＝人間の身の丈に合った自然のなかでの協同組合社会
- ・「独立インドが泣きうめく世界にたいして、その役割を果たせるのは、その何千という村落を発展させ、世界と平和を保ちつつ、簡素で気高い生活を採用することによってである」。

タゴールとガンディー



4 ガンディー＝タゴール論争とセンの評価

(1) ガンディー＝タゴール論争(1921年)

- タゴール:「現代は、西洋の力強い支配を受けてきた。それが可能だったのは、人類のために果たすべき大きな役割を西洋が有していたからである。……西洋との協力を保つことが悪いというのは、地方気質の最悪の形式を奨励するものであり、それは知的窮乏を生むにすぎない」(ガンディーの非協力運動を批判)。
- ガンディー:「私は、自分の家に垣をめぐらし、窓を閉めることを望みはしない。私は、すべての国々の文化の息吹ができるだけ自由に家の中を流れることを願う。しかし私は、その風に足をさらわれることを拒む」。→ボンベイにて外国製衣服を焼き払う。
- タゴール:各地で外国製衣服を焼き払う光景は、「知識と教養に鍵をかけ」ること。ガンディーの「糸を紡げ、布を織れ」とのメッセージが「果たして新時代の新しい創造への呼びかけであろうか?」、「もし大機械が西洋の精神に危険であるなら、小機械は私たちに もっと悪い危険ではないだろうか?」。

- ガンディー:「私のまわりの人々が、食物がないために餓死しつつあるときに、私に許される唯一の仕事は飢えた人々を養うことである……チャルカーこそ幾百万の瀕死の人々にとっては生命である。……詩人は明日のために生きる、そして、私たちも彼と同じようにすることを望むであろう。……飢えた人々の苦しみを、カビールの歌で和らげることは、不可能なのを見た…… 食うために働く必要のない私がなぜ紡ぐのかと人は尋ねる。それは、私は自分に属していないものを食べているからである。私は同胞を掠めて生きている。あなたの懐中に入ってくるすべての貨幣の跡を探ってごらんなさい、……糸を紡がねばならない。何人も紡ぐべきである！ タゴールも紡ぐがいい、他の人々と同じように！ 彼も外国製衣服を焼くがいい！……それが今日の義務である」

→タゴール沈黙。

(2) センによる論争の評価

- 「チャルカー批判をけっして止めなかった」タゴールが、「その経済的判断においておそらく正しい」。
- センのアンバル・チャルカー批判(1960年):「インフレ的で資本蓄積にマイナスに影響」。
- ガンディーの意図は、「資本蓄積」ではなく、人間の身の丈に合った経済において貧者を救済すること。経済発展に寄与しないことをもってチャルカー運動を否定的に評価するのは妥当ではない。

5 ガンディー思想と縮小社会論：センによる批判を超えて

(1) センのグローバル化理解

- 「グローバル化の反対側に位置するのは、偏狭な分離主義や頑迷な経済自立主義」。「世界の貧者から、現代技術の優位性や、国際貿易の効率性、開放社会の利益を取り上げて、その経済的苦境を改善することはできない」。
=>ガンディーの運動を「地方気質の最悪の形式」と批判したタゴールに近い。チャルカーの復活は、センの目に「世界の進歩」に逆行するものと映る。
- セン：市場による経済的繁栄、利己心、資本蓄積、分業、発展の中身としての「自由」などの諸価値を歓迎。→近代主義。

(2) ガンディー主義からみたセン経済学

- セン: グローバルな経済的繁栄によって貧困を解決
 - チャルカー批判、資本蓄積の擁護
- => 低エントロピー性(≡化石燃料を用いない)技術の妥当性を無視。
- 「貧困」を「絶対的剥奪」と理解: 「相対的剥奪」の文脈から切り離す。
- => 「相対的剥奪」にとらわれずに「人間開発」を理論化; 貧困と富裕の因果関係を無視(ロメーシュ・ディーワン)。
- 貧者は「特権的な人々が享受している社会的・経済的機会から排除されている」。「ヨーロッパ、アメリカ、日本、東アジアで起こったことは、他のすべての地域に重要なメッセージをもつ」。
- => 「特権的な人々が享受している社会的・経済的機会」の正当性を疑っていない。「特権的な人々」の「自由」の幅が、貧者の「自由」を制限することによって確保されている可能性を想定せず。

=>「ヨーロッパ、アメリカ、日本、東アジア」の人々の「自由」の幅を維持しながら、「他のすべての地域」の人々が同水準の「自由」の幅を享受することは、資源と環境の制約を前提として事実上不可能。

(3) ガンディー思想と縮小社会論

- ・ ガンディー思想：①低エントロピー性技術と簡素な社会、②貧困を絶対的および相対的文脈で認識、③生態系の枠内において一部の人々による富の独占を是正して貧者救済。
- ・ 持続可能な社会のためには、まず「特権的な人々」が「必要物」を自発的に削減してゆき、貧者の「自由」の拡大はそれと同時に図られる必要がある。
- ・ 人類が生き残りをかけてグローバル化の流れをよりよい方向に転換する契機は、センではなくガンディーの思想において見出せる。

• 縮小社会論の系譜:

E・F・シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』(1973年)

→「もうひとつの経済サミット」(TOES)『生命系の経済学』(1986年):
ハーマン・デイリー「定常経済学」; ヨハン・ガルトウング「経済自立
の理論」; スーザン・ジョージ(IMF政策批判); ワンガリ・マータイ
(グリーンベルト運動); ヴォルフガング・ザックス(第三世界の世界
市場との絶縁)

→W・ザックス『開発辞典』(1992年「脱開発」): C・D・ラミス(「世界の
富者の問題」としての「世界の貧者の問題」); イヴァン・イリイチ
(「Needs」の開発); ヴァンダナ・シヴァ(近代科学と自然観の喪
失); セルジュ・ラトウーシュ(「生活水準」の数量化); アシス・ナン
ディー(近代の国民国家批判)

→C・D・ラミス『ガンジーの危険な平和憲法案』(2009年); V・シヴァ(生
物多様性の保持とチャルカー評価); S・ラトウーシュ(脱開発とシン
プル・リヴィング); サティシュ・クマール(シューマッハー・カレッジ)

* その他: A・K・アリヤラトネ(スリランカのサルヴォーダヤ運動); ス
ラック・シワラック(タイの仏教開発)

おわりに

(1) 経済発展と平和: グローバル社会の二つの目標

(a) 貧困は、平和を脅かすので、経済発展こそが平和への道。

(b) 資源の制約から、やみくもな経済発展は、平和を脅かす。

<<< 私たちは、どちらの道を選択すべきなのか? >>>

・ガンディー: 「地球は、すべての人々の必要を満たすのに十分なものを提供するが、すべての人の貪欲を満たすほどのものは提供しない」。

・21世紀: 「グローバル化」の名のもとに、ますます多くの人々が枯渇性資源をいっそう激しく奪い合うのか、将来世代のことをも考えて、より簡素な生活に満足を見出すのかの選択を迫られる時代 (将来世代とのコンヴィヴィアリティ)。

(2) 人類を含む生態系の破壊を回避する開発

- ・ グローバル社会において貧者の「潜在能力」の開発は、富者の「必要物の削減」とともに(現代世代間のコンヴィヴィアリティ)。人間の身の丈の経済へと大きく旋回する以外に「近代」の矛盾を打開する道はない。
- ・ スミスからセンにいたる経済学は、成長経済(右肩上がりの経済)において人々を養う方策を考えてきたが、ガンディー思想に基づく新しい経済学は、縮小経済(右肩下がりの経済)においてこの課題に取り組む。
- ・ その課題は、成長経済を支えてきた利己心、資本蓄積、市場メカニズム、国家主導の開発など一連の「近代」の諸価値の対極に向かいながら、同時に「近代」において未曾有の規模に増大した地球人口を養うというきわめて困難な作業を意味する。

参考文献: 石井一也 [2014] 『身の丈の経済論——ガンディー思想とその系譜』法政大学出版社。